

特集にあたって

池辺 淑子（東京理科大学）

海外へ行くことに対して最近の若い人は消極的である、という言葉は数年前からさまざまなところで耳にするようになった。データとして実際にそうであるかは検証されていないながら、日本ではそのように認識されていることが多いようである。筆者はこれを大変に残念に思う。筆者が学生時代を過ごした1980年代、海外に行くことは自身を含めた多くの人の憧れであった。結局、自身は留学することができなかったが、できれば行きたかった、という思いは現在ももっている。

しかしいつの間にか、海外に出ることが若い人の憧れでなくなってしまったようである。その原因が何であるか、もちろん一概には言えないが、行くことのすばらしさを知る機会が減ったことが大きいのではないかと思うようになった。そこで、大学・大学院の学生さんや就職して時間が浅い企業の若い方を主な対象として、海外へ行くことのすばらしさを伝える、本特集を企画することを思い立ち、海外のご経験をもつ方に記事をご依頼した次第である。

ベテランの先生方、若い方、ご所属が企業、大学とさまざまな方にご執筆いただき、本特集は4編の記事で構成されることになったが、いずれも非常に説得力と迫力のある、すばらしいものばかりである。機関誌の特集としては多少異色であるが、若い方だけでなく、中高年の方にも興味深く読んでいただける、なかなかよい特集ができたと自負している。以下、簡単にそれぞれの記事をご紹介します。

最初の記事は伊倉義郎氏の「米国OR事情とORから学んだこと」であるが、大学への留学や企業に勤められたご経験、それに基づく米国と日本の文化的な違いが紹介され、さらには、大学で勉強するときの心構えや職探しの方法、豊かな人生を送るためのアドバイスもある、「人生の指南書」とも言えるものである。ORの「リスク管理」の考え方をういたさまざまな説明があるが、40年間を米国で過ごされ、大学、企業ともに豊富なご経験をもつ伊倉氏ならではの非常に感銘を受けた。海外へ出ることに興味がなくとも、参考になることは非常に多いと思う。

続いて山田雄二氏の「カルテックで培ったもの」で

は、山田氏の米国カルテックへのポスドク経験が、そのきっかけから、滞在先での生活、他の研究者との交流などを軸に詳細に紹介されている。日本とは全く治安や慣習が異なる地におけるアパート探しの苦勞、留学先の研究室に溶けこむための取り組み、学生との交流時間が少ない超多忙な教授に認められるための努力などが鮮明に語られた圧巻の一編である。自分の研究を理解してもらうために入念な準備を行うことの大切さを再認識し、自らが切り拓くとは、まさにこのようなことを指すのであろうとつくづく感じた。

三編目の記事は、流王智子氏、柴田宗典氏、羽田明生氏による「ケンブリッジ大学における研究プロジェクトへの参加」である。この記事では、鉄道総合技術研究所がケンブリッジ大学と共同で進める、情報技術で土木構造物の将来をスマート化するプロジェクトに三氏が参加されたことが紹介されている。具体的にはワイヤレスセンサネットワークや光ファイバを用いてトンネルをモニタリングする際の設置問題への取り組みが中心で、アルゴリズムの開発やロンドンの地下鉄に対するケーススタディについて述べられている。若い方に直近のご経験を語っていただいたが、英国特有の事情についても紹介され、海外で行われているORのプロジェクトに関する記事としても非常に興味深い。

最後は福田公明氏の「他流試合のすすめ」であるが、福田氏ご自身の海外経験談である。海外の魅力を説教じみた言い方ではなく、経験者が自ら語ることで伝えたいという気持ちでご執筆いただいたが、大変な迫力である。日本での就職をやめて渡航するにあたって考えたこと、海外に到着されてから留学先が決まるまでのご苦勞、北米大陸を車で横断された道中のこと、英語やフランス語の難しさなどが鮮やかに語られている。そして、日本人が海外に出ることに関する多くの壁とそれに対する向き合い方、越え方に関する経験者ならではの深い知見が紹介されている。筆者にとっても勉強になったが、是非参考にさせていただきたい。

本特集をきっかけに、海外へ行くことに興味をもつ（若い）方が増えれば幸いである。